



おもしろ にいがた学

新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子

プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）
東京で大学・研究室生活を経てUターン
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビュアーの仕事をするうちに、方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる
心理学・新潟学等講師、経営学修士(MBA)、新潟郷土史研究会会員
著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）
「おもしろ えちご塾」（桓文社）
「郷土とことわざ」（人間の科学新社・共著）等

「おっかなの晩げ」

多様な地形と自然に恵まれた新潟県は「ことば」「ことわざ」「習俗」「祭礼」等をはじめ、「民間伝承にまつわる行事」が多くみられる地でもあります。実は、以前よりあれこれ調べていた事項ですが、調査するほど奥深く、おまけに次第に頼みの綱である地元の古老は「なんだて、それ?」「最近耳は遠いし、物忘れするっけね」と加齢のせいにするし、町村合併で地域の伝承行事が消滅してしまうしで筆者はぐずぐずしておりました。そうこうしているうち、これが「死語」になろうとしている現実に直面。そこで今回、恐らく全国的にみても稀有な名称の「おっかなの晩げ」（人によってはおっかなげの晩）をお伝えしようと思います。

「おっかなの晩げ」。みなさまも「なんだて、それ?」と思われることでしょう。これは主に県内の阿賀北以北、とくに旧北蒲原地方、しかも旧新発田地方の赤谷地域を中心とした地に伝わる伝承行事です。（魚沼や東蒲原にも点在）

名称からしておっかなげなこの行事、「12月7日と2月7日（地域によっては12月7日のみ）の晩げ（共通語で晩方）は、恐ろしい一つ目（ところによっては三つ目）の魔物が出歩くので、良民は夜外出せず早く家に帰っておとなしくしてなせや!」という外出禁止の掟行事です。世にも恐ろしい、しかし誰も目にしていない一つ目か三つ目の魔物が、ああ、恐ろしや、一軒一軒戸口をコツコツ叩き村々を回っています。「戸締りしたか?」「門（かんぬき）かけたか?」「猫は家に入れたか?」「犬は繋いだか?」と細心の注意を払っても、おっかねもんはおっかねてば!

そのため良民は知恵を振り絞り、戸口にザルやら

フルイやら笊通し（竹で編んだ籠）をぶら下げておけば、あら不思議、あら痛快、一つ目や三つ目の魔物が「あきあ〜!こんげにいっぺこと、目玉があるとはおっかね、おっかね」と即刻素通り退散していくというものです。万が一、「そんげの迷信だ」とザルの類を出さないのめしこきの家には、魔物が隙間からすりりと入り込み、鍋、釜、下駄の類は皆化けてその家は化け物屋敷となるのだとか。

地域によっては、家じゅうにある道具、鍋、釜はもちろん帚、塵取り、着物等々にまで魔物が化けて居座るといふ伝説もあり、それはそれはおっかねものであります。化けた着物と知らず袖を通すのも、化けた箒で掃除するのも、戸口のザルひとつで回避とくれば、まさに安心・安全、我が家のホーム・セキュリティ、やれ頼もしや!のザル目・籠目であります。旧東蒲原では、笊通しと鎌を戸口にぶら下げたという記録が残っていますが、そのココロは、「カマわず、通れ!」。暮らしの中から生まれた呪（まじな）いは、先人たちの生活の潤滑油でもありました。また、戸口の前に下げたザル・籠の目の数を魔物が数えているうちに夜が明けて退散する、という伝説の地もありました。先人たちの「忌み」の習俗、そして昼に対する夜の「闇」が特別な畏怖の対象であったことが伝わってきます。では、なぜ、12月と2月の7日なのか?日にちに秘められた伝承を次回お届けします。

